

「情報があふれかえる社会」から「表現が編みあがる社会」へ

From the society drowning in the sea of information to the society that weaves representation

堀 浩一

Koichi Hori

東京大学大学院工学系研究科

University of Tokyo

This article reports the outline of the JST-CREST project aimed at the society that weaves representations. Our goal is a process of continuous representation by citizens. We report the preliminary results of the project.

1. まえがき

本稿は、JST 戦略的創造研究推進事業 CREST「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」領域（領域統括：原島博教授）の中の「情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築」の研究プロジェクト（代表：多摩美術大学須永教授）の途中経過の一部を報告するものである。本研究プロジェクトは2006年にスタートし、3年半ほどを経過したところである。本研究の目標は、「市民のメディア表現を、より豊かに、持続的に育む」ことである。そのために、芸術系の多摩美術大学須永グループ、メディア論系の東京大学水越グループ、そして情報技術系の産業技術総合研究所西村グループおよび東京大学堀グループの4グループが、学問領域を横断して協力しながら研究を進めている。その特徴は、技術主導ではなく、文科系のグループが主導する文化プログラムを中心として研究と実践を進めていることにある。

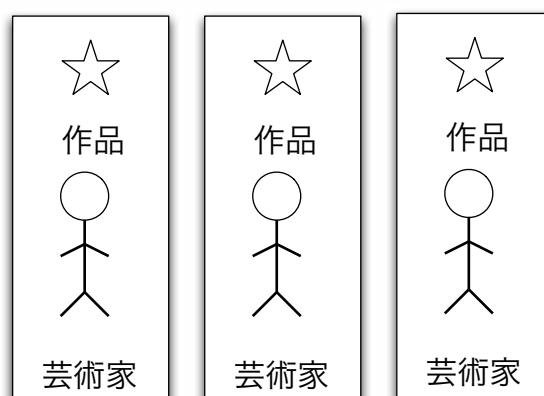


図 1: 芸術家と芸術作品

2. めざす市民芸術の姿

伝統的なプロフェッショナルの芸術家による芸術の世界をやや乱暴に図式化してしまうと図1のようなことになる。各々のプロの芸術家の芸術的な世界観に基づいて、いわゆる芸術作品が生まれ出される。芸術家と芸術作品のペアの関係は、原則として壊されることが無い。芸術家X氏によって生まれ出された作品Aは、あくまでもX氏による作品であって、その作品を鑑賞する市民によってその作品Aに手が入られることは基本的には無い。

これに対して、我々がめざしている市民芸術の世界を、これもやや乱暴に図式化すると、図2のようなことになる。この市民芸術の世界においては、プロの芸術家による芸術の世界では存在した芸術家と芸術作品という1対1の関係が薄れる。そのかわりに、誰によるものともわからない表現の表出と破壊と組み替えのプロセスが持続的に回転する、という姿をめざす。したがって、これは、図1における芸術家をアマチュア芸術家におきかえたアマチュア芸術の世界とは異なる。古くから存在しているアマチュア写真家による芸術写真の世界や、俳句愛好家による俳句の世界などを否定するものではまったくないが、実体としての作品よりも、表現の表出と破壊と組み替えが持続するというプロセスに重点を置いていることが我々のプロジェクトのひとつの特徴である。これは、実体としての作品の立派さが人々の喜びにつながることは認めた上で、さらにそれに加

えて、表現を持続的に継続するプロセスの面白さそのものが、人々の表現したいという潜在的な欲求を満たし、市民社会の新たな心の豊かさにつながるのではないだろうか、という仮説に基づいている。

現在発展をつづけている動画投稿サイトなどにおける市民の表現活動も、広い意味では、市民芸術の世界の一部ととらえて、論じることも可能であろう。しかし、それらにおいても、基本的には、作者と作品の間の1対1の関係は保たれていることが多く、図1における芸術家が一般の投稿者に置き換わった形態にとどまっているものが少なくないと言えよう。本研究プロジェクトは、それに対して作者と作品の関係を壊してしまう世界にまで進もうとするものである。作品そのものについても、完成作品というものは存在せず、永続的に変化あるいは進化させつづけることをめざしている。

3. 表現のプロセスを持続させるために

一般市民がいくら潜在的に表現の欲求を持っていたとしても、それが持続的な表現のプロセスにつながることは、自然な状態ではありえない。なんらかのしつらえが必要である。そのしつらえとして、我々の研究プロジェクトで試みているのは、文化プログラムと情報技術の両輪からなる構造の提供である。これを図式的に図3に示す。

文化プログラムとは、どのような人々に、どのような場を

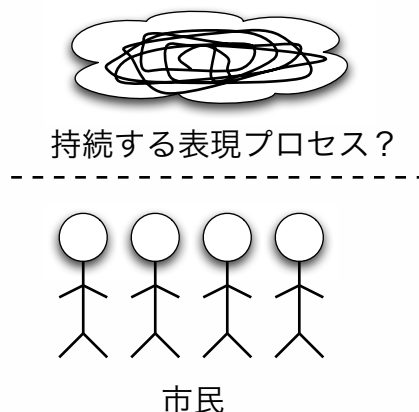


図 2: 持続する表現プロセスをめざして。

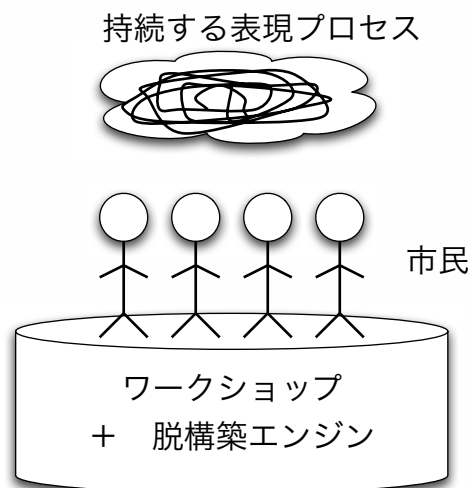


図 3: 持続する表現プロセスを支えるワークショップと脱構築エンジン

提供し、どのような動機付けを与え、どのような方法で表現を表出させ、どのようにしてそれを持続させて行くか、等々についての数多くの設定の組み合わせを言う。我々のプロジェクトでは、これまでほとんどの場合、ワークショップという形態で文化プログラムを設計し、実践してきている。これはまさにフィールドワークの世界であり、情報技術系の研究とは異なり、実践の経験を積み上げていくことによってしか知見の得られない領域である。本研究プロジェクトにおいては、水越グループにより、その文化プログラムの設計が行われている。一言でワークショップといっても、その参加者の種類、前提条件、実践の目標、実践の場所、参加者の人数の規模などが実にさまざまであり、その設計の指針を体系化することは容易ではない。現在のところ、専門家の水越グループの経験知を頼りに、その設計を行っている。

一方、我々情報技術のグループは、その文化プログラムと対になる要素として、市民の持続的な表現プロセスを可能にするための情報技術の研究を進めてきた。堀グループでは、脱構築エンジンと称するシステムの研究開発を行ってきている。これは、知識の液状化と結晶化と称するプロセスにより、知識を動的に進化させようという堀のアイデア [Hori 07] に基づくシステムであるが、その基本は脱構築の概念 [Staten 84] を図 3 に示した世界に適用しようということにある。個々の表現は、糸を織りなす繊維のようなものとなり、互いに絡み合いつつ少しずつずれていく。その糸が伸び縮み、表現の織物が織り上げられていく。その織物が再びほどけ、ずれ、新しい表現を生んでいく。そのようなプロセスを実現するためのサポートシステムを情報システムとして構築して提供することを試みている。

4. いくつかの実践により明らかになりつつあること

本研究プロジェクトにおいては、さまざまな文化プログラムと情報技術の組み合わせを実践の場において実験しているところであり、そこから得られた知見は、残念ながらもまだ十分に整理されていない。あるいは、整理されていないというよりも、むしろ、整理が不可能であるという知見を得つつある、と言ったほうがよいかも。ほぼ同じ文化プログラムとほぼ同じ情報技術の組み合わせで実験を行っても、ほんの少しの状況の差で、結果すなわち表現のプロセスがまわり始めるかどうか、

が大きく異なってしまう。

そこで我々はその渾然一体となった知見のかたまりを、そのまま渾然一体とした形で提供することを検討している。文化プログラムと情報技術の組み合わせに関する知識そのものに対しても、液状化と結晶化のプロセスを適用して、動的に進化させようということになる。

現在までに得られている結果のうちの一部を記すならば、次のようなことを挙げるができる。

ほぼ同じセッティング（文化プログラムと情報システム）を用意しても、参加者や表現のきっかけのお題によって、表現プロセスは大きく異なってくる。これは、あたりまえといえばあたりまえのことなのかもしれないが、従来の自然科学の方法でそれを評価することは困難そうである。

また、作者と作品の 1 対 1 の関係をこわすというのは、実は容易なことではない。どうしても自分の作品としての表現にこだわりを持ちたいという人々もいる。それはそれとして生かしつつ、持続的な表現のプロセスをまわしつづけるための工夫として、脱構築エンジンは有効そうであるという感触を得つつある。

5. むすび

ほんの一部にとどまってしまったが、「情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築」プロジェクトの途中経過を報告した。

参考文献

[Hori 07] 堀 浩一：創造活動支援の理論と応用、オーム社、2007。

[Staten 84] Staten, H.: Wittgenstein and Derrida, University of Nebraska Press, 1984. 高橋哲哉訳：ウィットゲンシュタインとデリダ、産業図書、1987。